様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22820071

研究課題名（和文）　ヘルダーリンの詩学から考察する「美的な快」
—脳神経科学と心理学からのアプローチ

研究課題名（英文）　Study of “Aesthetic Pleasure” from Hölderlin's Poetry
—Neuroscientific and Psychological Approach

研究代表者
小野寺　賢一（上賢一）（ ONODERA　KENICHI ）
早稲田大学・文学学術院・助手
研究者番号：80581826

研究成果の概要（和文）：
フリードリヒ・ヘルダーリン（1770-1843）の「音調の交替」理論において提示される「知的直観」、「努力」、「感情」の概念を、詩人のスピノザならびにフィヒテ受容の観点から解釈し、この三つの概念が詩的主体の認知プロセスに影響を与える生の要素を指すという、研究当初からの仮説の根拠を示した。また、これらの概念がそれぞれ、脳神経科学者アントニオ・R・ダマシオ（1944-）が用いる「原自己」、「情動」、「感情」の各概念に対応しうることを示した。

研究成果の概要（英文）：
The study interpreted Friedrich Hölderlin's (1770-1843) concepts of “intellectual intuition”, “endeavor”, and “feeling”, found in his theory of the “alteration of tones”, via his own Spinoza and Fichte reception, and confirmed the hypothesis that the three concepts indicate the vital elements that influence cognitive process of the poetic subject. Furthermore, the study showed that these concepts each corresponded to notions of “proto-self”, “emotion”, and “feeling”, as applied by neuroscientist Antonio Damasio (1944-).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011 年度	1,080,000	324,000	1,404,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,290,000	687,000	2,977,000

研究分野：ドイツ文学
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：（１）フリードリヒ・ヘルダーリン（２）ヨーハン・ゴットリープ・フィヒテ（３）バルーフ・デ・スピノザ（４）アントニオ・R・ダマシオ（５）「音調の交替」（６）「知識学」（７）『エティカ』（８）情動と感情の科学

１．研究開始当初の背景

抒情詩は詩的主体の思考や感情を直接的に表現する手段であると、一般的には考えられている。しかし従来の研究において、感情はしばしば自明の前提とされ、感情とはそもそも何か、あるいは抒情詩において感情はいかなる意味をもつのか、といった問いが立てられることはほとんどなかった。その最大の理由は、作品において提示される思考内容と感情や情動といった要素とを区別することの難しさにあると思われる。

自然科学の分野においても、情動や感情が主要なテーマとして取り上げられるようになったのは最近のことである。それはこれらの要素を客観的に取り扱うことは不可能であると、長い間信じられてきたからである。

しかしとくに 1980 年代以降、そうした状況は大きく変化した。とりわけアントニオ・ダマシオやジョセフ・ルドゥーといった脳神経科学者の研究成果により、情動や感情を客観的に測定する手法が開発され、これらの要素が人間の認知プロセスに及ぼす根本的影響がかなりの程度明らかになったのである。

また、これと平行するようにして、認知心理学、社会心理学などの各分野においても、情動や感情のメカニズムや、それらが認知ならびに判断に及ぼす影響の研究が進んだ。

研究代表者は以上のような背景において、情動や感情といった、人間に本来備わっている能力に焦点をあてることで、経験のあり方をあらかじめ規定している社会的・文化的諸条件に依存しない、抒情的表現の普遍的効果や法則を明らかにできるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、特定の文化的・言語的条件に依存しない、抒情的表現の一般的効果を明らかにすることにある。言い替えればこれは、抒情的表現がもたらす「美的な快」に特有な質について、客観的な説明を可能にするような論理的枠組みを構築することを意味する。とくに抒情詩において根本的な要素とみなされる情動や感情の働きに焦点を当て、脳神経科学の知見を用いてこれらの概念の客観的定義を試みる。その上で情動や感情が抒情的表現における認知作用に対して果たす役割について考察する。

３．研究の方法

詩学、哲学ならびに脳神経科学の知見を用い、情動ならびに感情と、これらの要素が人間の認知能力に及ぼす影響について考察する。主要な論及対象となるのは、フリードリヒ・ヘルダーリンの詩学、ヨーハン・ゴットリープ・フィヒテの意識哲学ならびにバルーフ・デ・スピノザの存在論、そして脳神経科学者アントニオ・R・ダマシオの情動と感情の科学である。

イマニュエル・カントの批判哲学はその優れた受容者たちによって、ドイツ観念論と呼ばれる哲学的思潮を生み出す動因となった。詩人であるヘルダーリンもまた、フィヒテの絶対的な影響下で、この思潮の形成に独特なかたちで関わった。彼は 1799 年終わりから 1800 年初めにかけて、いくつかの理論的文書を執筆するが、そこで展開される思想は、フィヒテが「知識学」で試みた意識の根拠の探求を、彼なりの仕方で押し進めたものであったといえる。

ヘルダーリンは意識に先行しこれを形成するものを「知的直観」、「もろもろの偉大な努力」（以下「努力」と略記）、「感情」の三つに分節化する。そして彼はこれら三つの根本状態に基づく認知作用の変化を詩作品において描出したと考えられるのである。これがいわゆる「音調の交替」理論の内実であると想定される。

したがってこの理論の分析は、本研究の目的にかなった、説得力ある観点を提供しうるといえる。しかしヘルダーリンのいう「知的直観」、「努力」、「感情」がいかなる内実をもつ概念なのかを理解することは難しい。そこで、詩人が深い影響を受けたフィヒテならびにスピノザの哲学を用いて、これらの概念の分析を試みることにした。なぜなら二人の体系にはそれぞれ、上記三つの概念に対応しうる用語が見られるからである。

とりわけ注目に値するのはスピノザの「コナトゥス」ならびにフィヒテの「衝動」である。両概念はともにそれぞれの体系において重要な役割を果たしており、ヘルダーリンのいう「もろもろの偉大な努力」に何らかの意味において対応しうると推測される。

しかし、スピノザとフィヒテの体系は本来相反するものである。まさにそれゆえに、「もろもろの偉大な努力」を「コナトゥス」およびフィヒテの「衝動」と比較検討することは、ヘルダーリンがどのような観点に基づいて彼の詩学を構築したのかを理解する上でも大きな意味をもつ。そればかりではない。「努力」は「知的直観」と「感情」との中間に位置するため、「努力」の内実を知ることは、残り二つの概念の内実と関係を知る上でも非常に重要なのである。

以上のような観点において、ヘルダーリンの用いる「知的直観」、「努力」、「感情」の内実が理解できたとしても、それらが彼とは異なる時代と文化圏に生きるわれわれにとって、特殊なものであることにかわりはない。したがってこの三つの概念を一般化する作業が必要となるが、そのための有効な分析ツールとなりうるのが脳神経科学者アントニオ・R・ダマシオの情動と感情についての理論である。

本研究はあくまで文学研究に寄与する目的で構想された。したがって脳神経科学の知見を用いるとはいっても、個々の実証的な臨床データを取り扱うことはできない。必要なのは、本研究テーマに関係しうる専門的な個別成果を結びつける一般理論である。ダマシオの研究は、情動や感情の働きと意識の諸相との相関的関係を体系的に示したという点で、まさにこの要求を満たすものなのである。

４．研究成果

（１）ヘルダーリンのフィヒテならびにスピノザ受容の観点から「知的直観」および「努力」の内実を解明した。

1794 年から 95 年にかけて、ヘルダーリン

はスピノザの存在論とフィヒテの自我哲学に平行して取り組んだ。その際に彼は「絶対的存在」である「一つの全体」、すなわち「存在そのもの」――これはスピノザのいう「実体」に等しい――について「語られうる」唯一の場合を「知的直観」として定式化する一方で、フィヒテが「知識学」で用いた「努力」の概念については、これを意識の必然的前提として把握した。

フィヒテにとって「努力」とは、「自我によって自己自身の中に定立された無限の能動性」、それも「阻止され、そして自己自身によってのみ自己を保持する」能動性である。ここでいわれる「自我」とは「理念」としての「無限な自我」、すなわちいかなる存在でもなく、「自己自身を端的に定立する」という自我の純粋能動性それ自体である。

純粋能動性としての自我はその本性上、「すべての実在性を自己の内に捉え無限性を満たす」ことで、端的な自己定立を実現しようとする。そのため純粋な能動性に対して抵抗が生じ、すべてが端的に自己である状態が阻止されたときにも、自我はその理念的状態を目指して障害を乗り越えるべく、際限なく努力するのである。フィヒテのいう努力とは、以上の観点からとらえられた自我の純粋能動性の働きにほかならない。

フィヒテにおいて「努力」は常に抵抗を乗り越えてゆく力として考えられており、この力が外からの抵抗によって限局されてしまうものとして現れるのは、それが一個の主観において「何か持続的なもの」として観察された場合に限られる。このように観察された限りでの「努力」が「衝動」である。

その際、抵抗にあくまで実在的に関わり、これを乗り越えようとする「努力」の本来的な活動性は「衝動」の「実在的能動性」として規定されることになる。その活動は常に抵抗によって限局されてしまい、自らの目的を達成することはない。そこで実在的能動性を限局する当のものを「衝動が因果性をもつときには生み出すであろうものとして」定立しようとする「観念的能動性」が働く。

このとき観念的能動性は抵抗を自我の外部の客観として表象するばかりではない。それは「知的自我」として客観を非我として定立しつつ、抵抗によって実在的には限局され観念的にはこれを限局するものとして感じ取られた「衝動」を今や自己として定立するのである。

ヘルダーリンのいう「努力」とは、厳密にいえばフィヒテの「衝動」に対応する概念であるが、いずれにせよ彼はこの時点でフィヒテによる「努力」のコンセプトに有限意識とその絶対根拠とを媒介するための理論が含まれることを理解し、これを「フィヒテ哲学の主要特性」と呼ぶほど重要視した。

以上の事柄は、それから約5年後に詩人が書いた一連の理論的文書において、より徹底したスピノザ理解に基づき練り直される。以前は「絶対的存在」である「一つの全体」について語られうるのは、「主観と客体が端的に」合一されている場合、すなわち「[…]部分的に合一されているだけでなく、したがって分離されるべきものの本質を傷つける事無しには、どんな分割も行われえないほど合一されている」場合に限られるといわれた。そしてこの「場合」に該当するものこそが「知的直観」であるとされたのである。

これに対して、1800年初頭に書かれた『抒情的な、見かけによれば…』においては、「知的直観においてのみ語られうるもの」が、上記の意味における「絶対的存在」とは考えられていない。「根源的に一致するもの」はむしろ、ある条件下においては「分離可能なより際限の無いもの」と呼ばれさえする。「分離」はもはや「存在そのもの」の場合のように、全体の本質を毀損するような事態としては把握されない。ここでは「一致」と「分離」が二つの異なる観点で見られた全体のあり様を示す語として用いられているのである。

「根源的に一致するもの」がもろもろの部分の集合というよりは、端的に、それ自体として考察されうる全体を表しているように思われるのに対して、「分離可能なより際限の無いもの」について言及される場合には、同じ全体が無数の外延的集合の総和としてとらえられている。

「存在そのもの」がスピノザ的実体を意味するのだとすれば、「根源的に一致するもの」は「属性」に、また「分離可能なより際限の無いもの」は「間接無限様態」に、それぞれ対応するのだといえよう。そして前者を根拠とした、後者における個体の生成こそが、ヘルダーリンによって「知的直観」と「もろもろの偉大な努力」との連関として定式化された事柄にほかならないのである。

このときヘルダーリンは「努力」をスピノザのいう「コナトゥス」の機能を含むものへと拡張しただけではない。彼はこの「自らの存在に固執する能力」を個物においてのみならず、それらの因果的結構としての自然全体の相――スピノザのいう間接無限様態――においてとらえるのである。こうして「根源的に分離するもの」の活動性全体は「分離への努力」として定式化される。

その際、ヘルダーリンは「努力」を意識の前提とする見解を保持することで、「コナトゥス」の働きに基づく意識形成の過程をフィヒテに由来する「自我と非我との相互規定」の論理に従い図式化することができたのである。

以上の成果は純粋な文学研究の枠内に限定したとしても大きな意義をもつ。従来1800

年頃のヘルダーリンの詩学は、どちらかといえば詩人のフィヒテ受容の観点から論じられる傾向にあった。これに対して本研究はヘルダーリン詩学の最大の前提がスピノザの存在論にあること、またヘルダーリンがこれをいかにしてフィヒテの「衝動」ならびに「相互規定」のコンセプトと組み合わせることができたのかを示した。

（２）「音調の交替」はそもそも、「素朴」「英雄的」そして「理想的」と呼ばれる各音調のさまざまな組み合わせの理論として構想された。当該の研究成果においては、「知的直観」、「努力」ならびに「感情」のそれぞれが、ダマシオの理論における「原自己」、「情動」、「感情」に対応するという研究当初からの仮定の有効性を確認し、この観点から「音調の交替」理論の基本的構造を読み解いた。

『抒情的な、見かけによれば…』からは、ヘルダーリンが「知的直観」から「努力」を通じて「感情」へと至る線的な展開を前提としていたことがうかがえる。ダマシオの理論を用いて解釈するならば、この展開は「原自己」（意識形成に先立つ有機体の物質的構造、つまり内部環境、内臓、前庭システム、筋骨格の各状態を閑断なく写し取っているニューロンの活動パターン）から、そうした身体状態の一連の変化にほかならない情動、そして情動の感性的知覚として生じる感情への漸次的移行を意味しうるのである。

「音調の交替」が以上のような「感官感受システム」の展開に基づいているとすれば、「努力」を根底におく詩的表現の「基底音調」である「英雄的」音調が、なぜ「知的直観」に基づく詩的表現の「外見」に備わるのか、そして「努力」から発する詩的表現が「外見」に「素朴」な「音調」――それは「感情」に基づく詩的表現の「基底音調」にあたる――をまとうのはなぜなのかが明らかになる。

「知的直観」を根底におく詩は、前意識的な生物的先駆体（「原自己」）から身体的反応（情動）への移行を表現し、「努力」を根底におく詩的表現の場合は、情動から感情への移行が主観と客観との相互定立を通じた自己構成プロセスを用意する。つまり、前者の場合は刺激に対して無意識的に反応する身体の運動が問題になるがゆえに「英雄的」=「精力的」な「外見」を有し、後者の場合は分裂を知らない自己同一性が問題となるがゆえに「素朴」な「外見」をもつのである。そしてそれぞれの「外見」の音調は次の運動の起点の音調、すなわち「基底音調」となる。問題は「感情」に基づく抒情的な詩がなぜ「観念的」な音調をもつとされるかであるが、これについては以下の仮説にとどまる。

ヘルダーリンとダマシオは共に感情をもつことの帰結として、全体との調和への志向が生じると考える。しかしヘルダーリンにとって重要なのは、他者との実在的な合一が不可能である以上、希求された全体性は「観念的」に構想されるにとどまるということであった。そもそも主-客の「根源的一致」は「知的直観」においてのみ可能だが、それもまた感性的に把握することはできず、ただ「観念的」に想定されうるのみである。恐らくはこれが「感情」を根拠とする詩の「外見」の音調が「観念的」とされることの理由、また「知的直観」から発する詩的表現の「基底音調」が「観念的」とされることの理由なのである。

以上の仮説を説得力あるものにするためには、今後ヘルダーリンの詩学において「感情」がいかなる体系的意義をもつのかを分析する必要がある。その際にはカント、ヤコービ、シラーなどの発言の参照も必要となるであろうが、中心になるのはやはりフィヒテの理論である。

以上の成果は、脳神経科学者デートレフ・リンケが『脳科学者としてのヘルダーリン』（2005）で示した見解に対抗しうる観点を提供する。この一般書はかなり大衆的な色合いの濃いものであるが、高名な脳神経科学者がヘルダーリンを論じた本であるという点で、本研究が避けては通れない対象である。リンケによれば、「全体」と「部分」との関係についてのヘルダーリンの考察は、脳の認知プロセス、とりわけ表象の産出過程おいて観察されるニューロンの働きと一致するのだという。

本研究はこれに対して、ヘルダーリンの論じる「全体」と「部分」との関係がスピノザの存在論と関わるものであること、これを脳神経科学の枠組みで論じるとすれば、表象の産出過程にではなく、それに先行する情動ならびに感情の働きに焦点をあてるべきであることを示した。

（３）ヘルダーリンの「音調の交替」が情動と感情の規則的な展開を表現するための理論であることを論じ、この理論に基づいて、万葉集の二編の和歌とヘルダーリンの哀歌『ディオティーマを悼むメノンの嘆き』を比較し、解釈した。

本研究全体として、「音調の交替」理論の単なる再構成にとどまることなく、そこから実際の詩解釈に応用可能な一般理論を導き出すことを目標のひとつとして定めている。その応用のひとつのかたちが比較文学である。具体的には、異なる言語的・文化的環境下で書かれた詩どうしを比較する際に、そこに表現される情動と感情とを「比較のための第三項」として用いることを予定している。当該の研究成果はこれを試験的に行ったものであり、本研究が完成した際に提示しうる理論の汎用性が先取りのかたちで確認され

た。

本研究の目標は文学における「美的な快」に特有な質をヘルダーリンの詩学や個々の詩作品から考察することであるが、現在完成しているのはその基礎となる部分である。展開部分では、ヘルダーリンが頌歌から次第に哀歌へと比重を移してゆき、最終的に讃歌を書くに至った根拠を、より強い「美的な快」の産出に求める。その際には個々の詩作品において示される詩的主体の認知のあり方が問題となるが、論述の主要な対象となるのは、そうした知性的要素と、これまで論じた情動や感情といった感性的要素との連関である。

ヘルダーリンの後期抒情詩にしばしば観察される理想と現実との乖離に対する嘆きは、頌歌からその改作、そして哀歌へと移行するにつれてますます強まる。そしてそれと比例するようにして、未来への期待の高揚感がより強く表出される仕組みになっている。この事実は、認識は緊張を生み出す不和、不快な矛盾や食い違いを前提とし、その「感情・認知」的な緊張解消が「快」をもたらすという、心理学者ルック・チオンピの「フラクタル感情論理」とも一致する。このことから、ヘルダーリンの詩作品に見られる困窮や欠乏の表現は、その解消を通じたより強い「美的な快」の産出のために計算されたものであると考えられる。

しかし、ヘルダーリンの後期讃歌においては、頌歌や哀歌に比べて、嘆きや悲哀といった否定的な要素がみられなくなってゆく。これは詩人が不快の解消を通じたより強い「美的な快」の産出の技法を用いなくなったことを意味しうるだろう。

スピノザによれば、悲しみの「受動感情」（「コナトゥス」の縮減）にとらわれている限り、私たちは自己と他のものとの出会いに関して、不完全な観念しかもつことができない。これに対して喜びや愛の「受動感情」（「コナトゥス」の増大）は、自己と他のものとの双方に存在する、ある共通なものについて、十全な観念を形成するように私たちをうながすのである。十全な観念の形成は「共通概念」をもろもろの様態に適用し、それらに共通の本質について知ることからはじまる。例えば「共通概念」うちで最も一般的なものは「属性」の観念であるが、これによって人は自然全体を一つの「延長」としてとらえることができる。そこからさらに認識を押し進め、一切のものに共通する本質の十全な観念に到達したとき、人は「至福」の名に値する「能動感情」を手に入れるのである。

本研究はこうしたスピノザの思想がヘルダーリンの後期讃歌に及ぼした影響を想定し、頌歌や哀歌とは異なる、讃歌特有の快の質について論じる予定である。実際のところ、ヘルダーリンは『アフォリズム』（1799）において、困窮を介さず、喜びや愛から、「[…] 悲しむことなく生を理解することができる者こそ、多くのものを獲得している」と述べている。「困窮」は「悟性」を「一面的で歪んだ」ものにしてしまうのであり、それゆえに「困窮」が介在する前に、「喜びから」、「人間と他の存在者たちを理解」し、「一切の連続的関係を認識」しなければならない。これこそが個別的な心情ではなく、共同体の歴史と運命とを歌う「讃歌的主体」に要求される態度だと推定されるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
（１）小野寺賢一「努力、コナトゥス、衝動――ヘルダーリン詩学にみられるスピノザ存在論とフィヒテの意識哲学との総合の試みについて」、『シェリング年報』第 20 号、2012 年、現在編集作業中につき頁数未定、査読有り

〔学会発表〕（計３件）
（１）小野寺賢一「「コナトゥス」としての「努力」――ヘルダーリンの詩学概念におけるスピノザ及びフィヒテの影響について」、日本シェリング協会第 20 回大会、2010 年 7 月 3 日、山口大学

（２）小野寺賢一「ヘルダーリンの「音調の交替」の理論について――脳神経科学からのアプローチ」、早稲田ドイツ語学・文学会第 18 回研究発表会、2010 年 10 月 2 日、早稲田大学

（３）Kenichi Onodera: Der Wechsel der Töne im Waka. Versuch eines Vergleichs japanischer und deutscher Lyrik. Tag der offenen Tür im JDZB, Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, 19. 6. 2010.

〔図書〕（計１件）
（１）小野寺賢一「ヘルダーリンの「音調の交替」について――脳神経科学からのアプローチ」、大久保進先生古稀記念論文集編集委員会（編）『規則的、変則的、偶然的――大久保進先生古稀記念論文集』、朝日出版社、2011 年、137-160 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
小野寺　賢一（上　賢一）（ONODERA KENICHI）
早稲田大学・文学学術院・助手
研究者番号：80581826